

韓 昇熹（ハン スンヒ）

韓国出身／2019～2020年度奨学生

東京外国語大学 総合国際学研究科 博士課程

良い研究は時間との闘いの中で現れるものだと私は思います。特に、歴史学を専門とする私のような分野の研究者にとっては、どれほど多くの史料を収集・整理し、読み取ったかによって研究の質が左右されると言っても過言ではありません。限られた時間のなかでより多くのものを読むためには、一定の時間の確保が何より大事だと思います。その意味で、2019年4月から本財団の奨学金を受給することによって、研究に専念できる時間が確保できたことに喜びを感じます。

現在、私は東京外国語大学で日本とアジアをめぐる思想史を専門とする先生の下で、戦後日本人の朝鮮認識というテーマで研究を進めております。東京外国語大学は名前通りに言語学に強いイメージがありますが、実は様々な地域の歴史を研究する教員も大勢います。東南アジアや中東、アフリカなど他の大学ではあまり接する機会のない国々の歴史について研究しておられる先生方に接することができることがこの大学の強みです。私も、日本思想史あるいは日朝関係史を専門としていますが、学内で行われたアフリカ地域の歴史に関する研究報告を聞く機会が何度かあり、大いに刺激を受けたことがあります。

最初から、多様な地域の歴史に関して興味があつて東京外国語大学に入ったわけではありませんが、時間のある限り、学内で行われる様々なイベントに参加する中で、日本で行われている研究分野の範囲の広さに驚きました。韓国で中東やアフリカ地域の研究者は恐らく数える程度しかいないと思いますが、日本では既に多くの研究成果が蓄積されています。専門である日朝関係や日本思想史という分野だけに目を奪われることなく、世界史のなかでの日朝関係史、日本人の朝鮮認識を語るためには、一見関係なさそうに見えるようなアフリカ研究にも時間をかけて目配りをしなければなりません。韓国とは研究分野の広がりが全く違う日本で研究生活を始めたことで、普段関心を寄せなかった地域にも興味を持ち、視野が広がる経験をすることができました。

また、時折に知人の紹介で通訳のアルバイトをすることがあります。去年もいくつか通訳アルバイトをしましたが、そのなかでも災害が発生した時の日本の自治体の障害者対策調査インタビューは印象深いものでした。通訳アルバイトで知り合った韓国の災害問題研究者によると、日本は地震や洪水など災害被害が多い国で、その先進的な自治体の対応システムを学ぶために様々な国々から毎年訪れるそうです。もちろん、日本でも災害が発生した時の障害者向けの対応には不十分なところはあるようですが、全く障害者のための処置をとっていない韓国に比べると、自治体や関連団体の対応は学ぶべき部分が多いと考えました。このように、日本では昔から地域に根付いた市民運動団体が自治体と協力関係を結びながら人々を進めていくことが数多くあります。通訳という仕事を通して日韓両国の経験を共有することに少しでも役に立ったのではないかと考えると、何気なく嬉しい気持ちになりました。

ます。今後とも、機会がある限り、このような仕事に携わることで、日韓両国の市民間の連帯を築いていくのに少しでも力を貸したいと思っております。

2018年には修士論文の一部をまとめた内容の発表を様々な学会で発表しましたが、2019年には個人発表ではなく、共同研究に挑戦しました。研究の質を高めるためには自分の研究を相対化し、客観的に見なければなりませんが、自分の欠点はそう簡単に見つかるわけではありません。自分で当たり前に思えたことも、違う視点の研究者たちと議論するなかで新しい角度から分析することが可能になります。2019年から奨学金を受給することで、少し時間的な余裕が出たのでいくつかの研究会に参加しました。関わった研究会のなかで、その一部の研究成果を国内の学会や国際学会に発表することもありました。

ただ、台湾で行われた国際学術大会では東京外国語大学の大学院生同士で私たちのグループが発表する際に、同時に日本や韓国で知られている研究者たちのグループ発表も行われたためか、私たちの発表を聞きに来た人が少なかったことは残念に思っています。国際学術大会は、最新の研究成果を海外に発信する場でもありますが、国境を超えた研究者間のネットワーク作りにも重要な役割を果たしています。私たちのグループは日本人1名、韓国留学生2名ですが、台湾の研究者たちと交流・情報交換をするなかで、また新しい出会いが生まれるのではないかと内心期待していましたが、台湾人研究者は1人も私たちが発表するところには参加しませんでした。日韓を超えて台湾までネットワークを広げたかったですが、その目的を果たせずに日本に戻ったことを残念に思っています。その悲しさを胸に刻み、今年は同じメンバーで新しいテーマをもって国際学術大会の発表を準備し、日韓だけではなく、他の国々の研究者たちとも積極的に交流を行う計画です。

具体的な今年の研究計画としては、1960-70年代に日本の教師たちが学生たちに朝鮮の歴史をどのように教えたのか、そしてその過程で日本の歴史家たちはどのような役割をはたしたか、つまり、歴史家と歴史教育の関係に関する論文を書くことに集中する予定です。このテーマは歴史学より主に社会学や教育学の分野で研究されてきました。私は分野横断的な発想に基づき、教育学や社会学の分野の研究成果を積極的に活用しながらも、理論の検証を研究方法とする社会学や教育学とは違う形で研究を進めたいと思っています。やはり、歴史学は広範囲な資料調査に基づいて物事について具体的に叙述することを特徴としているので、歴史学者と教師の間の具体的な交流の記録、彼らを取り巻く当時の国際情勢、戦後日本の朝鮮史研究に対する史学史的なアプローチという三つの軸を中心に分析を行う予定です。

このように、専門である歴史学に限らず、多様な分野の研究を積極的に取り入れることによって物事を総体的に見ようとする試みは、今後博士学位取得後、日韓もしくは東アジアのレベルで学術的なシンポジウムをコーディネートする立場になった時にきっと役立つであろうと確信しています。また、今後大学の教員となって学生たちと向き合うことになった時により開かれた視点で多様な問題意識を持っている学生たちに教育指導をすることができるでしょう。学生の目線から物事を理解することで、上から目線で押し付ける教育ではなく、社会の様々な側面について共に考えて行く指導ができる教員となるために、これからでも多様な分野の研究者、多様な地域の研究者との関係を持ち続けていきたいと思います。